

フアッション誌とカクテル 佐佐木頼綱

最後の時評原稿となる。歌壇の動向にアンテナを張ろう、出版社で触れられる多くの情報を伝えようと理想を持って原稿に挑んだのだがとても難しかった。話題となった歌集や歌人が残るものなのかどうかの見極めは難しく、目立つ歌人の発言や話題も我田引水のものが多い気がして気になった。

昭和二十二年に刊行された「人民短歌」の中で小田切秀雄が歌壇を「実に馬鹿らしい枠」と記し、短歌に「熱い情熱と人間性を取り戻す」ことを求めている。七十年以上前の話ではあるがこれを読んだ際、時代に摩擦されぬ視点の鋭さに驚いた。文芸評論家、近代文学研究者という歌壇と距離を起いた立場がこの視点が生んだのだろうと考え、私も歌壇外の人間と接した際に彼らの業界の問題点を訊き、彼らの視点を借りて歌壇を捉え直して時評を書いていたのだけれど読んでくださった方からすればさぞ読みにくかったのではないかと思っている。

個人的には他にも、自分の不幸話や社会批判ばかりを詩にする傾向のあるラップと比較しながら現代短歌を眺めたり、現代詩人の詩や、ライトノベルの文章と口語短歌と並べたり、信綱の『思草』や『新月』の試みが評価されなかった事と近年の虚構の問題、歌壇という編集者と歌人が作り出す迷惑の流れの弊害などを自分が漠然と感じている事とその類型を記していきかけた。個人的

なライフワークとして続けていこうと思う。

私は歌壇は十年一日の世界でも構わないと思っている。万葉集が未だに我々の心に響くことを考えれば千年一日でも良いのかもしれない。文化は風土と他勢が生む伝統を引き継ぎながら、それぞれの時代にあわせて派生する。短歌もこの文化の形から外れはしないだろう。長い時間変わらぬ伝統を肉体とすれば、文化は服。

現代短歌も昭和・平成という時代が生んだ軽やかな服となる。私としては自由で多様な歌を生む民族特性、肉体の方が気になるのだが、多くの歌人の興味は現代という時代に必然性のある服や、最新の服であるようだ。新しいデザインの靴、時計、はやりのスタイル、コーディネートを提示し、モデルに着せるフアッション誌と歌壇総合誌は実はよく似ている。もちろんフアッション誌を否定するつもりはない。それぞれの時代が生み、表現した文化が伝統の蓄積となるのである。

短歌のツボを抑えたAIが文学性のある短歌を大量生産してしまふ未来への不安はある。願わくば有名無名も飲み込んで豊穡さを築いてきた歌の文化がAIの歌も飲み込んでほしいと願っているのだが、そんな事を気にしていたときに話したバーテンの話が面白かった。カクテルは飲む人が大事なのだという。飲む人がいつ飲んだ、誰と飲んだ、そんな記憶の数だけカクテルには味があるのだという。短歌も今後誰が作ったか、なぜ作ったかが重要になるのではないか。AIが作ってくれたカクテルよりも、話が面白いバーテンが作ってくれるカクテルのほうが美味しく感じるように。先輩歌人を何人か見送ってきた立場としては実感を伴いつつそう思う。